



EX-150

1976年/150回路/ ¥13,000

EX-シリーズの最高峰。後にEX-181も出たが、最も売れた。電子ブロックの代表作だ。

↑EX-150のパッケージ。宇宙を航行するロケットのイメージだった。

電子ブロックはシステム玩具だった!

電子ブロックはパーツセットを買い足すことにより、機能をアップさせることができるシステム玩具だった。最初はお小遣いに合わせてEX-15やEX-30などを買ひ、その後にパーツを買い足すことができた。このグレードアップの楽しさも人気のひみつだった。

EX-15

1976年/15回路/
¥4,300

21個のブロックで、1石ラジオなど15の回路が組めた。



EX-Aパーツ

リード線、トランスとキースイッチブロックのセット(¥1,200)。

EX-30

1976年/30回路/
¥5,400

23個のブロックでうそ発見機など30の回路が組めた。



EX-Bパーツ

ICアンプと7個のブロックのセット(¥2,800)。

EX-60

1976年/60回路/
¥7,700

ICアンプ付き。30個のブロックで電子サイレンなど60の回路が組めた。



EX-Cパーツ

リード線と8個のブロックのセット(¥1,500)。

EXシリーズの開発

1976年、当時学研の玩具部門の開発者だった永岡昌光は、悩んでいた。1973年に電子ブロック機器製造株式会社と業務提携し、以後も業績はあがったものの、期待したほどの結果には至らなかった。「もっと売れていいはずだ」

連日、社内外のスタッフとミーティングを重ね、国内はもとより、海外のバイヤーも含めて改善の可能性を追究した。ひとつの結論が出た。電子ブロックのコンセプトはそのままにデザインを一新した新シリーズ

を作る。こうして生まれたのがEXシリーズだった。

本体の色は黒を基調とし、形は当時流行したラジカセをイメージさせた。ブロックも黒に映えるスモークグリーンを採用した。その他、アンテナコイル、バリコン、CdSやメーターといったブロックに入りきれない部品は本体に収め、操作性、機能性の向上をめざした。

また、EX-15、EX-30、EX-60、EX-100、EX-120、EX-150と組める回路数の違いなどで多くの種類が市場に投入された。電子音が作れるシンセサイザーブロックがついた最上位機種EX-181が1979年に発売され、全7機種が出そろった。これらは同じ筐体でともに互換性を持ち、下位機種でもブロック等を買ひ増しすることで、さらなる拡張がめざせる。この点も子どもたちにウケた。ラジオ、アンプ、ワイヤレスマイクといったおなじみの回路から、うそ発見機、すいみん機、運動神経測

ブームの頂点、EXシリーズ登場

EX-100

1976年/100回路/
¥9,000

ICアンプ付き。38個のブロックで電子オルガンなど100の回路が組めた。



EX-Dパーツ

コンデンサマイクとイヤホンのセット(¥1,500)。

EX-120

1976年/120回路/
¥11,000

本体に透明カバーが付いた。コンデンサマイクがついて120の回路が組めた。



EX-Eパーツ

メーターとアンテナ線、ブロック8個のセット(¥2,100)。

シンセサイザーパーツ

ブロック20個分のスペースを使うパーツ(¥4,600)。

EX-181

1979年/181回路/
¥17,400

シンセサイザーパーツが入った最上位機種。波の音や蝉の鳴き声等いろいろな音が作れた。



機能を追加した新型、FXシリーズ

FX-マイコン

1981年/165回路/
¥14,500

デザイナーが新されたEXシリーズの後続FXシリーズ。この機種ではマイコンでモグラたたきゲームなどが作れた。



FX-メロディ&ウォッチ

1981年/145回路/
¥16,500

デジタル表示の時計がついた機種。各種の時計やメロディICパーツによる音作りが楽しめた。



定機といったお楽しみ回路まで、自由自在に姿を変えるその玩具は、斬新なデザインとあいまって子どもたちの心をわしづかみにした。当時、クリスマスの時期のデパートの玩具売り場にはEXシリーズを求める父母や子どもたちが行列をなしていたという。また、欧米へも輸出され、「世界の電子ブロック」へと飛躍した。

その後の電子ブロック

大ヒット商品となったEXシリーズは、1986年に生産終了するまでの10年間で累計約50万台を売り切った。だが、80年代に入り、新機種のFXシリーズなども作られたが、徐々に売り上げは落ちてきていた。大きな理由は1984年に発売されたファミコンだった。

新興の電子玩具にその座を奪われた電子ブロックは、静かに市場から

撤退していった。

2001年、大人の科学シリーズのアイテムとしてEX-150の復刻版が発売される。1976年当時買えなかった子どもたちが大きくなり、大人買いができるようになっていた。そんな人たちの支持を受け、15万台を越すヒットになった。

そして1976年の登場から四半世紀の時を越え、登場したのが今回のふるく「電子ブロックmini」だ。基本的な形と機能は、できる限り踏襲した。ぜひあなたの手で実際に電子回路を組んで、実験を楽しんでほしい。長い歴史とノウハウの積み重なった電子ブロックには、いつの時代もかわらぬ夢と希望が詰まっている。

※文中の敬称は略させていただきます。
※ここに紹介した製品は、電子ブロック機器製造株式会社の「バーチャル電子ブロック」、教育用の実習用電子ブロックを除き、すでに生産・販売は終了しています。